2020 年 10 月 25 日　NANAWATA 山内若菜展トーク抄録

「描くこと、生きること」

ゲスト：岡本同世（毎日新聞ウェブ編成センター）

山内　絵描きの山内若菜です。

岡本　会社員の岡本同世です。岡村さんからいただいたテーマは「描くこと、生きること」という大きなものですが、1977 年生まれの私たちなりにお話しできればと思います。

山内　同い年です。

岡本　ふたりとも話すのが得意じゃないんです。私が「人前で話すのは苦手で」とメッセージを送ったら、山内さんが、たぶん慰めようと思ってくれたんでしょうね。「私なんか、話すのは下手だし、主語述語がまぜこぜだし、聞くのも下手だし、聞いてないし」と返事をくれて（笑）。

山内　よく、人の話を聞いてないって言われるんですね。自分の世界に入っちゃっているので。対談、大丈夫かなと思って。

岡本　そんなわけで、皆さんは、「この人たちは何が言いたいんだろう」って思いながら聞いてください。今から 3 つの街が出てきます。それぞれの街と、山内若菜的キーワードだと私が思っていることを絡めながら話したいと思います。まずは福島の「色」。私が 2018 年に見に行った銀座の個展では、牧場を描いた大作が展示されました。2011 年に東日本大震災と福島第一原発事故が起きて、その後、山内さんは福島に通うようになった。

山内　2013 年から浪江町に通うようになりました。

岡本　牧場に通うようになったきっかけを教えてください。

山内　2012 年の後半に、地元のチャリティ展で、現地を見ていない状態で福島の牧場展をしたんですね。そのとき、「こんなもんじゃないよ」って言われて、2013 年に連れて行ってもらったのがきっかけでした。

岡本　そして 2016 年に東松山市の丸木美術館で個展を行った。

山内　真っ暗な、洞窟的な作品だと言われました。

岡本　2018 年に、私が山内さんの作品を知るきっかけになった銀座の中和ギャラリーで、今年 2020 年の 8 月から 9 月にかけては東京のギャラリー・ユマニテでも個展を開きました。

山内　3.4m×3.1mの大きい絵を発表しました。

岡本　イメージとしては、この空間の床から天井までの感じかな？　同じ牧場を描いているんですが、だんだん色が出てきましたね。これはどういった変化ですか？

山内　真っ黒だった頃は、（訪れている）牧場主の怒りの気持ちと一体化しながら描いていました。だけど今は対象化して、色をつけるようになってきた。それは牧場主であり、自分であり、自分の絵を創るという感覚的な眼が三位一体になって、より対象化して、絵を自分の心から出していきたいなと思っているんですね。

岡本　一体化しているときよりも、今の方が「心から」になっているということですか。

山内　前は飲み込んでなくて、目から手へ描いていた……。

岡本　色がついていなかった時期は、手探りだったわけですね。その中で見えたものを手から出していた状態だった？

山内　白黒でした。それから対象化することで色が出てきた。そういう流れなんだろうな、と。何となくですけど（笑）。

岡本　ユマニテでの個展と同時並行のようなタイミングで描かれていた作品群が、ここで展示されている川越の絵ですね。川越のキーワードは「時間」なのかなと思いました。今までとちょっと違う街の見方をしたと話してくれたけど、どんなところが？

山内　《夜の時の鐘の風景》の絵が、大切な分岐点だったんですけど。光を描こうとして空気が描けた。ふらふらっと向こう側が見えて、空気感が抜けた感じになっていった。自分の視点が時を見ているような絵になって、手を動かしながら、わーっと、絵が教えてくれたというか。あれ、こんなの描けちゃったというのがこの作品なんですよね。そして、こういうふうに広島を描きたいなって教えられたというか。

岡本　作家はみんなそうなのかな。自分の作品から何かを教わったり、見つけたりするんですよね。子どもを描いた絵についても、どんなふうに描かれたのか教えてください。

山内　《川越に立つ少女》というタイトルなんですけど。男の子が……川越で見た、こちらのスペースの息子さんの思い出と、いろんなところで見た今の子どもが口を隠す仕草と、時の鐘や銀行の前に立っている人間の存在の透明感だったり……ここにいま立っている、生きているっていう感じを出したんですね。

岡本　背景に川越の街があって。モデルは息子さんだった？

山内　そうなんです。この絵を描こうと思ったのは、NANAWATA で小さい男の子が出てきて、恥ずかしそうにしてっていうのがあって。それから、コロナで口を隠す子どもに会ったりして、それを重ね合わせたり……。

岡本　口を隠すというのは（ものが言いにくいという）比喩ではなくて、現実として……。

山内　子どもが、お母さんに「だめよ、マスクもしないで」って止められながら、私の前で口を隠したので、こういう時代になっちゃったんだな、人が人を怖がる時代になったんだなっていう切ない気持ちで……子どもを描くときにどうしても口を隠しちゃって。今は《唇は蕾》っていう作品をずっと描いているんですけど、唇をつぼませて、これから花を咲かせるんだよっていうシリーズで、その一環でもあると思います。

岡本　そうした大切な分岐点から向かった先が、次の街である広島。広島は山内さんにとってどんな土地なのでしょうか？

山内　広島から教わることが本当に多いと思っていて。9 月中旬に、世界平和記念聖堂やノグチ・イサムの橋などを見てきて。先人たちが残した素晴らしい宝があって。それを今後忘却しないように「花束」にして作品に取り組みたいな、と。そこに夜の時の鐘の表現を入れ込みたいなと思っているんですよね。

岡本　つながっている。

山内　川越を経て広島に行っているという感じが、自分の中でしているんですよね。

岡本　忘却というのは原爆のことでしょうか。

山内　原爆が落とされたっていう事実を忘れないように、「モノがなくなっても、ある」という状態にしたいなと。被服支廠も見て来たんですけど、いま取り壊されそうな動きが出ていて。

岡本　被爆建物の。

山内　「モノがなくなると、人は忘れる」っていう言葉も（広島の人に）聞いて、忘れないようなモノとして、物質としての絵を作りあげたいって思ったんです。鳩だったり、花束だったり、すごくベタなんだけど、まずベタなまま描いてみて、作品になるまで工夫して。象徴の向こう側にある意味深いものを見つけ出して……出会ってほしいなと。

岡本　ここからは、「描くこと」の話に。目に映るものだけを見ていたら、こうは描けない、といつも思います。どんなふうに見ようとしているんだろうか。その向こう側っていうのは、どうやったら見えるんだろうか。

山内　いちばん小さな弱い立場にさせられている者の声を聞きたいな、とずっと思っていて。見えなくて帰ってきても、それを描くことが見ること。精神によってどんどん見えて来て、声が聞こえるな、とか……広島では被爆した馬や犬の情報もあったので、写真を見ることによって、自分が見たような気持ちになってきたんですね。取材では、あんまりそういう話は聞いてないんだけど、聞いたような気持ちになって。魔術にかかって、帰ってきて術をまたかけるというか、そういう流れをできるまでが本当に見て帰って来るってことじゃないかと……。

岡本　描いてはじめて見たことになるっていうことかな。

山内　描いて、見つけて。素材も和紙だったり、自分とリンクしやすいような対象に描いて、そこで見えてきて、作品になるように努力するという……ひたすら努力なんです。

岡本　描く時の支持体、モノ自体ともやりとりがはじまるんですね。（アトリエ付近の松の写真を指して）こう抱きついたりして。ユマニテで発表した龍の絵も。
山内　海龍を描いた作品。私の家のすぐ近くの松林が伐採されちゃいまして。松を残したい運動から絵ができたんです。
岡本　松の声も聴きたかったんだ。
山内　そうですね。松に抱きついて（笑）。
岡本　小さいけれど確かに生きている、というものを見て、抱きついて、それから描くんですが、とにかく描く。福島の居酒屋でも、向かいの女性や隣の方を、にゃはは、とか言いながら描いて。2次会のスナックでも素敵な店員さんを描いていた。
山内　そうですね。オーナーも美しい方でしたね。
岡本　後ろ姿まで描いて。どういうことなんだろう（笑）。
山内　おしりを描いて（笑）。美しい……と。
岡本　二人で大衆酒場に行ったときも、隣でずっと描いてるんですよ。私は酎ハイ飲んでるんですけど。
山内　飲んでた、飲んでた（笑）。
岡本　山内さんは、ひたすら描いてる。描いて、水を流したり、こすったり、やぶいたりということをしていく。
山内　和紙の特性として、にじむのが（重ねた紙に）うつるんです。それを利用して何枚も連作するんですね。私の描き方は水とのやりとりで、垂らしこみを多用する。アトリエがいつも水浸しで。
岡本　水とのやりとりなんですね。
山内　水が本当に描いてくれちゃう。水を乾かした後に、こんなの描けてる、という喜びの跡なんです。夜ぐちゃぐちゃにして、朝拭いてもう一回描くというのを多用してます。うつりこんでいる絵には、あまり自己意識が出ていなくて。描いちゃってくれる絵なので、教わることもいっぱいあります。素材との呼吸感ですか。毎日描いていると、会話できるようになる、できたような気がするんですね。
岡本　素材そのものとのやりとりがある。
山内　最近なんですよね。ここ1年くらい。仕事をやめてから、ずっと和紙と生々しいつきあいになってきたので……。
岡本　和紙と生々しいつきあいをなさっておられる（笑）。
山内　こっそり描いていた頃はね。びちょびちょにやったら怒られちゃう。何さぼってんだって。
岡本　会社で描いてたの。そりゃ怒られる（笑）。
山内　印刷機をまわしながら、わきっちょでいつも描いていて。まあ、そんなのは本当に、仕事覚えてからなんですけど。
岡本　素材とやりとりをして描いたものに、福島のペガサスがあって。
山内　暗いところにいる、私だけが見えていたペガサス。
岡本　（当初の作品について）ここにペガサスが見えますか、と山内さんに問われた中学生が、見えません、と答えた。ペガサスなんかいない、と。
山内　やっぱり見えないよな、と気づかされた。もっとちゃんと描いてくれと中学生が言ってくれたことで、わかりやすく出現させたいなと思ったんですね。
岡本　初めて山内さんの展示を観たときに、来場した方と話しながらメモをとっている様子が印象的でした。話を聞いて取り入れることもあるし、全部がそうじゃないし。
山内　加筆するかどうかは、私が決めていく。
岡本　とにかく手が動いてしまう絵描きの山内若菜と、プロデューサー的な役割の人が二人いて。
山内　一人二役をやることが大事かな、と。でもいただいた意見は大事なんで、自分の中で取捨選択するためにも、いつもメモをとるようにしてますね。メモ魔です。でも、岡本さんに言われたんですけど、全然人の名前がわかっていなくて。確かにそう、誰が言ったとかあんまり覚えてなくて。ただ言われたことが大事なんですね。
岡本　誰が言ったか、ではなくて、内容が大事。
山内　すみません、人の名前は覚えてないのですが、言われたことは忘れないようにしています。
岡本　《牧場》などの大きい絵だけではなくて、小さな絵のひとつひとつも、すべての絵が未完成だという言い方をしますね。
山内　加筆するかは別として、途中段階の絵のような感じがして。大きな絵は特に、終わりのない旅をしている気がします。展示して、修復しながら見てもらって、中学生が 3.11 のことを見てくれたらなと。それをライフワークにしていたんですけど、今年はコロナで全部なくなっちゃったので、自分も口を塞いでいる状態かなと。
岡本　こういう状況なので、「私も蕾だ」と。
山内　見て、描いて、そこからまた見えてきて、描いて、とループしています。
岡本　ぐるぐるしながら生きていってる。今年はイベントも少なくて、色で言えば赤ですね。収支が赤字。
山内　そうですね。でも、4月に会社が倒産してくれて、良かったなって思っていて。
岡本　何て言い方だ。
山内　退職金代わりに会社の印刷機を買ったんですけど、それが糧になっているというか。新しい会社に行かなくて良かったです。これから絵描きとして生きていくんだと。赤い収支でもいいんですよね。時間が大事なんですよね。
岡本　こないだ話してたことと違う！
山内　いや、お金も大事なんですけど（笑）。
岡本　そう捉えていると聞いて、ちょっとほっとしました。
山内　本音と建前が（笑）。
岡本　今のがどっちだったのか、ちょっとわかりませんが（笑）。そういうところから……何でしたっけ。
山内　見過ごされがちな存在、動物たちが被爆したり、子どもたちも大切な命を傷つけられたり、そういう声を出すこともできないような小さい存在を描かせていただく。自分が小さいから、小さいものがより目につくじゃないですか。そういう立場で描いていきたいんですね。小さい命を大きく描きたい。
岡本　他人事として、「光を当てなきゃ」と思っているわけじゃない。私たち自身が小さいからだ、と。
山内　いわさきちひろが子どもを描くのと、山内若菜が描くのはちょっと違うって岡本さんが言ってくれて。そうだな、私自身が子どもなんだな、と。自画像を描くように子どもを見て、新鮮なもの、未知なる存在として描いているんですよね。
岡本　《川越に立つ少女》は、なぜ実際に出会ったままの少年ではなく、少女なんですか？
山内　自分に引きつけて描いているんですよね。自分の中の少女をそこに見て、自分自身の存在として描いている。ナチュラルに描けちゃうんです。一日一枚的な感じで。子どもって描きやすいなって、楽しく描けちゃう。
岡本　描きやすいっていうのは、テクニカルなことじゃなくて。
山内　技術はまだまだなんですけど、感情移入がしやすい。
岡本　山内さんの大きい絵は、持ち運ぶために畳んだり開いたりしているうちに折れ目のところに穴が開いて、その穴から光が射していた。（向こう側にあるものを）見つけようとして目をこらす、象徴的なことのように思えて、写真を撮りました。
山内　この写真は、岡本同世さんの作品ですね。穴が開いているからこそ、光が放たれるっていうのがわかった作品になっていて、この写真が私はとても好きでして。
岡本　そう、私たちが見てもらいたいのは、穴とか、閉じた口元の蕾の向こう側ですよね。
山内　向こう側です、うん。破れたヒビとか、そういうところじゃないと見られない光がある。小さい光かもしれないけど、そういう光を見つめていく。ロウソクの灯が消えないよう手を当てるように、描けると思うんですね。岡本さんの視線のような意識が大事だと思ったんです。穴から光が放たれている、そういう絵が描きたいですね。　（まとめ：岡村幸宣）